



義太夫雜誌



第 三 號

義太夫雜誌第三號目次

論語

義太夫と國家の關係……………一丁

古曲

上るり十二段(兼前)……………三丁

(淨瑠璃のはじめ)

玉ものだん五ごんめぬひものいごん六ごんめ

文園

鶴の雌雄(譬喩經の譯)……釣深亭……素樂……六丁

俳句并短歌……………六七丁

批評

豊竹若太夫の事……………豊澤團平……………八丁

情歌見立評俳句……………知顔太夫……………九丁

竹本住之助に付て……………藪澤道人……………十丁

都賀太夫の事……………十丁

團十郎宗十郎夜討會我的爭評決……………十一丁

義太夫の作は凡て忠義の作……社辨……………十二丁
市村座評の辨……………同上……………十三丁

雜錄

天狗狐につまゝる話……………翼々居士……………十四丁

(附思想の辨)

女義太夫まさ鶴狐となること……………十六丁

茶碗屋巴太夫筋附の事……………十七丁

ザの字づくし……………十七丁

市村座類焼に就て……………社辨……………十七丁

雜報

厚生館三府義太夫大會○十三太夫の事○大坂に於ける播磨太夫○松方伯と美壽尾太夫○信州松本の

天狗連○大隅團平の一行○蟹甲將軍○十三太夫の

評○博多に於る竹本土佐榮○越路に浪太夫

餘興曲子

女義太夫五名投票報告(其他數件)

女義太夫五名投票報告(其他數件)

義太夫雜誌

第三號

明治二十六年
三月三十一日

發兌

論說

義太夫と國家の關係 (承前)

時昔の義太夫謠曲家が忠節なることは既に前節に説き來りしが如くにして彼等は常に慎で帝の則に違ひ后天后土を崇み雨露の恩澤を忘れざらむが爲に愧懼に和して秘曲を盡し森羅せる萬象を見るが如く撮すが如くに謠ひ語りて人心を感化せしめ以て天下泰平國家安穩を(神官を太夫と云ひ義曲家をも亦太夫と云ふや社稷に誓ひ國家の隆平を祈るに因るなり是西の宮の愧懼師より起るを云)祈りしが如きは素より區々の衷情なりと雖も亦た義節の大なる者と云つべき也若し之を浮屠氏の亡靈の爲に施戒鬼を修し或は期すべからざる未來に世の安樂ならんことを望みて偶像を饗し法會を行

ひ多額の費用を冗費する者に比すれば其懸隔せること幾許ぞや近松氏早くもこゝに看ありて着慣し法衣も脱却して都に上り月卿雲客に交り得しも素より名譽の爲ならず忠魂研精の爲あれバ漸くにして浪華に出て義太夫に力を合せ大ひに斯の道の發達を助けし解脱の中の解脱なり此外斯道の効勞家と稱すべき者は皆是貧人からず各自貴重の財産を擲ち或ハ地位を捨て公道に依て之に従事せし者かれバ決して私の名利の爲にあらざるべし然れども今の義曲家は糊口の爲にするにあらざれば則ち慢心自負の爲に誘導されたるに外ならざるべし故に人に譽められむことを望むの情は先にして人を感化せむとするの情は其次か或は毫もあらざるかなり然るに本論の主旨たる國家に對しては如何なる效績あり

りやと問はゞ我は更に既に既往の歴史を以て對へむとす
 治平鎮靜の結果は腐敗壞亂あり足利氏の治平二百年に
 滿たざるも人已に之に倦み豪族四方に蜂起して侵掠を
 慾にし天下は麻の如くに紊れたり、徳川氏の治世は三
 百年に向とするも竟に其綱紀を失はず 遇ま由井の
 正雪大鹽平八郎の如き大事を謀る者あるも其赤心の如
 何の問はず輿論を以て反賊となし舌を卷て其大膽を慄
 れ再び其轍を履む者あきは他あし當時の義太夫家が勤
 王の大義を大聲謠吟するの外猶も主従と云ふ黜に就て
 は農商工に至るまで其關係の深きとを拳々明示するに
 怠なれば徳川氏は間接に俗に所謂相伴を得たるなり
 斯の如き媒介に依て更に久しきに維持し得たる治平の
 間には腐敗の病毒を醸さずして寧ろ維新今日の大沿革
 を來すの原素を養成したるものゝ如し故に其革命の際
 夥多の殺戮交々相起りしも一として尊王大義の争に出
 でざるはなく終に其結果として多數の諸侯は王旗に屬

し一大戦争に因て明治の泰平を畫き來りしも一として
 名利勳賞を貪るものあく却て所領の藩地を返上し私有
 の器船をも上収するに至る實に驚くべきの結果ならず
 や

既に義太夫の發生以來斯驚くべきの治績あり又斯の如
 き未曾有の沿革のあるを見れば我義太夫謠曲も亦其原素
 の一分ありとして應に大なる答あかるべし

斯に於て我輩は數千年の古支那に於て生れたる「義」
 の一字が此蜻蜒州に渡りてより種々の辛酸を嘗め來り爰
 に淨瑠璃謠曲の改良家義太夫氏の名に冠り漸くにして
 此一種の謠曲の通稱となり爾來社會に大なる動作をな
 せしが猶將來の國家に大なる關係を懷くべき力あるこ
 とを哲學上試に説き出さむとす (以下續出)

古 曲

上るり十二段 (承前)

(淨瑠璃のはじめ)

小野通女作

玉ものどん

五どんめ

りたまひつゝあづまのかたへくぐらせけるそうけ賜は

でざるはなく終に其結果として多數の諸侯は王旗に屬

(淨瑠璃のはじめ)

小野通女作

玉ものざん

五ざんめ

其後上るり御せんは引ける琴ひのわこんかつこせうま
ちりきをもおしどゞめもんなるふへをてうもんありあ
らおもしろのふへのねやかほどにふくをふく人にてん
ぢくにては大しやうもんしゆのけしんかや又いふどう
のさいらいかくわんたんせいしのらいかうかや昔より
笛のじやうずをたづぬるにへいけかたに小まつのさ
んみしげもりかからはしの中將どのかつねもりの御し
そくむくわんの太夫あつもりか次になりひら扱又よど
のつの鳥の三郎しなのゝ國にはきをよし長兵衛の助ひ
どとせぬまのうずみよてうたれ賜ひしけんしさまのか
みよし其には八なんどきはらに三なんどう山くら
まにれいしますうしわかきみこをめいよのふへのでう
づどうけ賜わる是よりもはかのみやこはへいけのけん
じのよとてい更になし草葉の露までへいけへなびくつ
ねなればいかやうにもけんじのきみたちちりにまし

りたまひつゝあづまのかたへくづらせけるそうけ賜は
るやはぎりさるへき名所にてのぼりくぶりの大みやう
かうけのちごちのあまたのふへもきししかどもかほ
どのふへのねいまざなく上ろうとむまれては春はまた
はなのまへにて日をくらしそはよこゝろをうつすもの
ひとへに心をかけずともたれありとも心あるらん女房
たち主をひとめ見てまいれ玉ものまへとぞ仰ける玉も
このよし承りくれおいのうすきぬとつてかみにかけし
らすにおりもんくわいはるかに立いで御ろうしのお
すがたを一め見るよりも心ことばもたよられず玉もが
こゝろぞかわりける君にこのよし申ならバ聞てのこひ
をめさるべしといそきやかたに歸りいかにや申さんわ
か君様たい今もんにてふへをふく人はさある人にてさ
らにおしきのふのひるのころ大かた爰につかせ賜ひし
かね賣吉次のふたかのうまおひくわじやにてさからへ
しがあまりたびのどせんさにやまどづけにめをあけて

さんろか[△]するの草かりふへをふくなるぞやわか君様とぞ申ける上るり此よし聞召扱は玉もかいつわりよこゝにたとへのさむろふそむかしよりたつたはつせのうすもみむ見ぬと哥人はしるとさくめい人ひとをそしらず神いやしろをきらわれず佛はほんふをえらまれす[△]大かいちりをえらますつちにこかね石にすいしやうていの中にもはちすとて見な人は雪やこほりとへたつれとどくれはおなじたにかわの水と聞時のあさけにへたてはなきものをいてよく見てまいれ玉ものまへとそ仰ける玉も此よし承いまた秋にもあかねとも時あらぬかほにもみちをさつとちらしあわぬことバのふせいして君の御まへをすんとたちつほねをさしてそいられけるどにもかくにもかの玉ものまへのめんぼくなに、たとへんかたもなし

ぬいものゝぶん

六ぶんめ

其後上るり御せんは重て十五夜をめされいかに十五夜

きやうぬはれたりめてのはかまのひほたてにのあまの

うけたまわれかほどにふへをふく人はたゞ成人にてよもあらしいかなる人そよく見てまいれ十五夜いかにど仰ける十五夜此こと承うすきぬとつてかみにかけしらすに立出つま戸をそろりとおしひらき月の夜かけに一めみていかにやかたにいかに申さんわか君様みつからか月の夜かけに一め見まいらせさむらふかたいなる人にてましまさすゆふべ長しやにてしやくどり賜ひしかね賣吉次かうまおひくわじやにてましますかろの出たちこそはあやかなりはたにはきやうこうじろのかたひらめし上には又しけまきそめやかくまきの小袖をめしひたゝれはいかさまからぬのゝ上なんかと打みへてぢをばかちん水色に山はどいろにせめさせてむかしよりげん平兩かたゝかいをぬいものにはぬはれたりゆんてのひほたてよりかたのうちこしまてのけんしのうち神正八まんゑかき鳥井のし[△]ぶんにてまいぬをぬはれたり袖口にはくしやくほうわうたもとにはつはめのあい

つとはひらきつばみひらきのそのありさまを日産んめ

其後上るり御せんは重て十五夜をめされいかに十五夜

り袖口にはくしやくほううたもとにはつはめのあい

きやうぬはれたりめてのはかまのひほたてにのあまの
たくほくをもつてあさまのたけのゆふけふりとふしの
たかねの夕けふりとたちもふところをぬわれたり扱か
たのうちこしまてはへいけのうち神あきのいつくしま
の大明神をかき鳥井のしやたんにこまぬをぬわれ
たり袖口にはおしとりつかひたもとにいはまちどりの
たちいにこかれしふせいをもぬわれたりうしろのもの
を見てあれはたうどのましか千疋日本のましか千疋ぬ
われたりたうどの大國あれはどておもてをしろくのを
あかくせいかさ大きく心もゆふにぬわれたり日本は小
國なれいとてたもてをあかくはをしろくせいちいざ
く心をたけくぬられたりとうどのましは日本へござん
とず日本のましはどうとへわたらんとてとうと日本の
しほさかいちくらかおきにてゆきあいてこそうござし
のかまんのていをそぬわれたりきくとちむすびを見て
あれのゆんでのきくとちつほみし時めてのきくとちざ

つとはひらきつばみひらきのそのありさまを目隠しめ
いしよの花むすひかひきよくをつくしてむすはれたる
と申昔これにいかてまさるへきゆんてのはかまのま
へくりににけんしのぼりさきばすへまで小松を千
本小すきを千本ぬわれたりこすきのゑたや小松のゑた
に白はとせんばすへをくいてかなたこなたへまいめろ
ひしそのふせいをぬわれめてのはかまのまへくりにを
見てあれのへいけのばささばすへまで小松を千本
小すきを千本ぬわれたり小すきのゑたや小まつゑた
のところへかれたるていをぬわれたりゆんてのはか
まのものたちくりににはけんしのしらはた七なかれし
るきいにてぬわれたり扱またいたのせみくちにはけ
んしのうち神正八まんのそのしやにしら鳩つかひす
をくいてはつとたつてたけのばやしてはをやすめけん
しのみよをは千代にやへせんざいとびいつるていを
ぬわれたりめてのはかまのものたちくりにまはへいけ

のあかりた七なかれあかきいとにてぬわれたりゆんで
 のはかまのけまわしくよりよへいけは三千よきけん
 しは一千よきにて大勢いはつて入くもてかくなは十も
 んし八はなかたといふものにきつてまわるたりふしへ
 いけのあかはた三ほんうちおり残りし四本をはたさほ
 にくるくどひんまいて舟そこにおさむるていをそぬ
 われたりめてのはかまのけまわしくよりにはまこもに
 花しやうふかわらやあきにせきしやうふおきにたつあ
 みどうくどなきさにちどりいそよりて浪かさつと
 ゆりたてへいけは舟にうちのりいつくもしらすこき
 のく其ふせひをぬわれたり御こしものを見てあれ
 こかぬつくりと打みへてこじりにほしをふくませてさ
 けをにはほけきやうのやくわうほんのまなんてうたせ
 さけられたりれもてのめぬきをみてわれはけんしの氏
 神正八まんうらのめぬきはきた野の天神つかしらに
 こんからせいたかくりからふどうとみへにけるつかし

にもぐれちる葉の無常をしらすさまを見て、ゆくさき

らには樂たしけなくも三日みたびあらわしたるをほし
 を見てあれにいかさまひたりありと打みへて一すんま
 たこのをぼしたてにてさよわけたかくひとしめてそめ
 されたりとしを申さば十四か十五かすきたら十六才
 かと打みへてすかたを申さばきのふかけふの山てらう
 たちのちですかたまなこにくじの入たるにいかさま百
 まんきかろの中の大しやうと申ともれぬたるすかたは
 さらになしわか君様とを申ける

文 園

雉子町 近江樓の寓

多職妄吐僞情遊

淨瑠理は盲に見する舞臺かあ

鳩の雌雄

鈞深亭素樂戲譯

むかしくそのむかし雪山の北の方なる僻陬いと睦
 しき一ど番の鳩、鳥よりゆく秋の空ものすこく吹く風

なく、また誰をも我巢に近けたることは夢にさへおぼ

こんからせいたかくりからふどうとみへにけるつかし

しき一と番の鶴、鳥りゆく秋の空ものすこく吹く風

にみづれちる葉の無常をしらすさまを見て、ゆくさき
の程も悲しまれ、いとさみしくを覺へけるが、はや冬
の日も近かければ、今よりは木の實を探りて藏めねき、
雪ふり來るもともに饑へさる覺悟やあさむと、互ひに
かたらひて、その雌鳥には番をさせおき雄鳥の日に
木の實をどりにいで、三十日あまりを重ぬれば最早木
の實は巢に充ぬべしと思の外却て三日ほど前に見たる
よりも其量すこしへりければ雄鳥の始めて、嫉の心を
おこし、いたく雌鳥をあじりいへる様、われの日にい
でゆきてあこのこといしらねども、からきおもひをし
つゝ、とりきたる木の實はいく日を経るも積ることな
し、れん身はさためて、誰そつれきたりて、わがいでゆ
くあとにくひたのしむものからむ、うらめしのおん身
がふるまいかなど、かこちければ、雌鳥は露ほどもた
ぼへなき難題なればこはあさましのれんうたがひよ我
身は君のおわさぬひまにひと足も巢をはなれたること

なく、また誰をも我巢に近けたることは夢にさへおぼ
へずとさましくに陳じたるも雄は更に聞き容るへきや
うもなく嫉ましさのあまり竟に雌を啄さころし、こゝ
ちよげに獨として居たりけるが、うの宵俄に雨ふり
來りてあくる朝に興きて見れば木の實は巢の上にとぼ
るゝほどに充ちければいとふしぎに思ひよく考へ
ければ前の日に實の減りしは乾きたる故なり、今増へ
たるは雨に濕ひて脹れたるありとはじめて心づき可愛
の妻よと叫びつゝせん方涙にくれにける(佛書譬諭經)
義太夫本館谷の作は是等より工夫せしものにはあ
らざるか

是は軍人の公達にや麻布鳥居坂邊よりとて左の軍歌め
きたる短歌を寄せられたり正義、睦、兩派和熟を勸る
ものゝ如くおかしき様あれとも韻脚正しければ其儘に
かゝけおく

絹一と筋は弱けれど、集るときは万斤の
 物にも耐ゆる力あり、正義睦と組分けの
 争するは不利あるろ、皆々派名を打捨て、
 正き義理をば打守り、中睦くおさめがし
 おさめがし



此團扇南北
 東西よも上る但
 世間の勢力の従ふ

批評

豊竹若太夫の事

豊澤 團平

豊竹若太夫は大坂長堀橋筋二丁目の佳人通稱河内屋勘
 右衛門といふ元録十年十八歳にして竹本采女と稱し淨
 瑠理をよくす同十二年道頓堀東の芝居を新築し西派と
 競ふて興行す是東流の元祖なり享保三年三月豊竹上野
 少椽を受領す同十六年赦に依て参内し御簾近き處に謠
 曲數段を演じ以て 歡慮を感め奉りしに御感淺からず
 重ねて豊竹越前の小椽重恭を受領し猶御親筆を以て塵

梁軒の號を賜ひ至大の恩榮を蒙る

此若太夫は當時紀伊和歌山の藩侯信房卿の爲に愛せら
 れ親く伺候して謠曲を演じ且懇話すること屢々なりし
 が七代の將軍家繼公逝去に依て信房卿は將軍家を襲ぐ
 に當り享保八年吉宗と改名し既に將軍の宣下あり江戸
 に入り賜ふとき大坂日本橋を越へむとして若太夫の事
 を思ひ出しあごりの爲に逢ひ見たしとて駕を留めて
 路の上に引き見賜ふて懇話の後今より久しき別れなる
 べし何にても望のことあらば申出づべしとのたまひし
 に若太夫も今更將軍に向て求むることの何一つあき旨
 を述べたれども、たつてこのことにつきいろく考ふ
 れども何不自由と申こともなければ再三辭退せしが漸
 々に一つを按じ出せり其時恰も己が芝居櫓の上の幕裂
 け古び居たれり、之を一つたまりるべしと請ひしより
 いと易きことゝて日を経て紫縮緬に葵の綾を染ぬき
 寶ひぬ之を櫓の上に張り置しが徳川氏の小吏等此下を

重ねて豊竹越前の小椽重恭を受領し猶御親筆を以て塵

賚ひぬ之を櫓の上に張り置しが徳川氏の小吏等此下を

通行するにも一々禮拜せざるを得ざれば心ぐるしとて之を取下げ舞臺の側の上に張り置しも猶心遣ひとてまた更に外の幕にて上を蔽し紫地の紋のなき所少しを露し置けり若太夫が澹薄此一事を以て推し知るべし技術に於ても當時並なき程なりしも自ら一派を爲せし程ありて古來の譜節といふ少々異なりてはでやかある上稍無理な様に聞ゆる所もあり其他同人のことにつき間然する所を聞かず

因に記るす此若太夫と名のりし次第は和歌山のわかに縁りて彼の紀州侯よりつけられたるありと

情歌見立評

麴町 知顔太夫

○竹本小虎

梅と櫻の色香をくらべ中にすました糸柳

○豊竹二二三

花は浮世の愛嬌ものよ野暮な人にも香をおくる

○竹本綾の助

岡ぼれしてさへ浮名がふつに戀じやでるのづ新聞紙

○竹本越子

花の色香につい浮されてくるふ小蝶の夢ごころ

○竹本京枝

月にむら雲花にのあらしどかく浮世のさへりがち

○竹本熊玉

寒いけれどもさしでる月にあけて詠むる窓の花

○竹本熊梅

義理や人情をいち／＼立りや辛き浮世に身がたゝぬ

○鶴澤三生

雪の肌をばちらりと見せて解けやすいぞへ縞子の帯

○竹本小春

月の雲間を洩れでる迄はしばしとめたきほどゝぎす

○竹本光熊

心盡して咲せた花を蝶が来て刺す面にくさ

竹本住之助ニ付テ

本郷 藪澤 道人

世の中は三日見ぬ間に櫻哉一二年間に藝道大に上達せり音聲は綾之助嬢が流鳴浮誇あるに加かずと雖其堅固にして正確なるに綾嬢に比べて一段の妙味あるが如し更に語を換へて云へば綾嬢の緑野十里花落鳥啼の趣あり住嬢は斷岩千尺水落石出の風致あり其語り前に付て一言に之を評せば綾嬢の正を以て勝ち住嬢の奇を以て勝つ更に琵琶行の句を借りて之を評せば綾嬢は間關鶯語花底滑幽咽泉流水下灘、住嬢の此時無聲復有聲銀瓶乍破水漿迸と云へきか兩之助共に是若き好一對それは扱をき住嬢の節の師匠小住丸出と云ふものあれども少しく取捨する所あるに似たり音の抑揚調の轉換等いつも大受あり躰度は幼若なるも蔭に悠然たる風采あり加るに無邪氣なるどころ愛嬌あり姉あなが可愛らしい子ですよと云ひしも亦無理にあらざるべし但し

語り前に付て一言致し度は音聲の故か或はまた節のゆゑか知らざれども一句一涙聞手に感動を興ふべき句たどへばお駒が可愛夫へ義理立て、云々等の如き語り手が一段の力を添へ十分の感動を惹起すべき所にして嬢が他に於ける十二分の腕前にも似ず感動を興ふることの少なき箇所ある様に思はるゝ我々素人の耳には如何にも残念なりそれはともあれ幼若にして如此技倆は府下女義太夫社會に於て稀なる所否絶て無しと云ふも嬢の肩持つにあらざるなり

都賀太夫

山城の國伏見の生にして頗る美聲あり義太夫歴史中にも其名著しく殊に中將姫野崎かどを語るに妙を得たり曾て浪華の大芝居に箱根靈現書上のとき悪代官が落魄の初花を見染め強迫して姦にせむとして却て初花に

擲けつけらるゝ處を語り大に喝采を得たりしが江戸に

郎の十郎にて装のことより一場の議論起り宗は云ふ

擲けつけらるゝ處を語り大に喝采を得たりしが江戸に
來り集せ席に出て語りしより大に浪華人の誹を受けた
り其頃は太坂にては人形芝居はくろうと義曲家の大道
場として誰にても此に來りて演技するを耻ぢざるも集
席あぞに出るものは卑賤の女義太夫の外にあらざり
し位ありし然に都賀丈が江戸に來りし頃は當地に人形
芝居とはあらざれば據なく集にて語りしかも其頃
の集の猿若の歌舞妓の支配を受る例なりし故にや歌舞
妓座より故障を申し出しにより止むを得ず歌舞妓座に
幾分の収金をして語りしといふ然れ共其技其聲大ひに
關東の氣風に適ひしにや大に好評を得たりと今淺草の
公園に此丈の紀念碑あり心ある者は往て看るへし

團十郎宗十郎夜討會我爭の評決

笹木寸長

數年前新富坐に會我物語を演せし時團十郎の五郎宗十

郎の十郎にて装のことでより一場の議論起れり宗は云ふ
夜討のときは雨ふりなれば草鞋を穿くにあらざれば滑
りよろめくの恐あれは草鞋をはくべしと團は云ふはき
ものは不用なりと然して紛然決せず終に藁を以て趾を
くびり滑べらざる様にして草鞋をはかざることを中裁
説に決し夫よりこのかたは何れにて演するも曾我兄弟
は趾を藁にて結ぶことにありぬ然れども是さへおかし
き折衷とこそ思はる

元來この名高き復讐の宵は雨降り出し逕路泥になりぬ
るも野外の働を要せず故に草鞋を穿く必要なし指す敵
工藤祐經は陣屋の内にありて其士卒も連日の狩に疲れ
熟睡して前後を覺へず殊に雨さへ降り出したれば物音
も聞き紛れやすく忍び入るには屈竟の宵なり若し此機
會を失ひきは切齒をさすもまた得へからず兄弟に取て
は大事の時なり、よしはき物をはき來るにもせよ今忍
び入らむとするには脱ぎ捨てゝ入るころ當然あらめ盜

賊にても人の家に忍び入らむとするには草鞋を脱にあらずや是はしき物しきひなどに頼かざるが爲あり決して屋外の闘ひを望むものにあらずもしも方に一も祐經は屋中を遁れ出で野外に於て戦ふことを要するときは一方に數千の味方あり如何に豪雄なるも其志を遂げ得ざることに二尺の童も之を知るべし例ひ和田黨あとの心に翼る者あるも大將頼朝の手前もあれは戶外に刃を交ゆることあれ誰一人此浪人同様の者の助力して其身を失ひ其家を亡ず者あらむや故にもし陣中に於て仕遂げ得ずむは二人の命も此夜限りの露にて再ひ事を爲さむこと思ひもよらず故に忍び入るに二入の決心は跣足になるまでの注意ありしや論を待たず然して既に志を得て戶外に出で名乗りを擧げて敵をかまはず切死するや豪雄の潔よき最後の体を示すのみ又五郎が手に當る程の敵もなければ頼朝の陣所にかけて入りしは必竟毒喰ば皿までの氣込に過ぎず殊に頼朝は祖父の讐な

るも父の讐にはかへられまじ且亡父も義父も頼朝には使へし程の義理あれぬあながちに頼朝を覗ひしことゝあかるべし然らば一度ひ父の讐を報ひし上り兄弟にして其上の望はあかるべければ改めて草鞋をはき或はわらぐりなどして更に戶外の闘を挑むの悠々としたる間はなかるへし故に我輩の矢張はぶしを賛成す見よ古代の圖繪斯る場合には跣足のもの多し我輩等も幼少のころまでは武藝を脩するに戶外といへともはき物を用ひしことなし第一に古の武の夫は今の者よりも足の皮も厚かりしことを知らざる可らず尙識者の意見を待つ

●●●●●

義太夫の作は凡て忠義の作なり

と豫てより弊社が主張せるより此程外神田の井蛙子が詰問の一報を寄せて曰く一の谷嫩軍記に「敵と目ざすは安徳天皇と云ふことあり如何なる譯にや」と此作たるや最も忠義の人々の作なればいかでか 天皇

竟毒喰バ皿までの氣込に過ぎず殊に頼朝は祖父の讐な

此作たるや最も忠義の人々の作なればいかでか 天皇

が源家の敵なりと云ふことを得むや然れども陣屋の場
にては平家よりの間者も入り込み居るやも圖られず殊
に義経を兄頼朝より離間せむと謀る隣人もたしかに入
り込み居れば夫等にわざと裏を聞せむと自ら 帝の在
しますあらは帝をも助け奉り寶劔をも都に廻復せむと
願ふの意志はあれどもとぼけて斯くは云ひしよふに作
したる者あるへし現に舊恩の爲に敵敦盛をも助けむと
最愛の一子を殺し身代りに爲しおくも其實は物語らず
敦盛は打取りたり小次郎は手負ながらも勳功ありしな
どと本意にあらぬ虚ごとを説きつゝあるにあらざや斯
意を知らずして猥りに作者を咎め賜ふあ
然れども單に天皇を敵と云ふことさへ恐あれはとて此
頃は「敵と目ざすは平家の一門と語るものあり此方か
寧ろ聞衆の惑を惹き起さでよきやも知らず
因に記す瀟磨の浦組打の場にて熊ヶ谷か敦盛を招き
返す所に「平家の大將軍と見奉る」と云ふ所あり之は

蓋 大將分と書きたるを寫字が軍の字は云ひ習けた
る句調されはから誤たり
斯く更めて語るも妨なければ願くはかく更めたり

都新聞市村座を評して曰

秩父庄司重忠が西海の合戦をかつせんと云はれしが彼
はかせんと行きたし」云々とあれども梨園の法に於て
い左もあることにや義太夫の語法に於てはやはりかつ
せんと辭に重みを持つこそ至當なるへし獨り義太夫に
限らず長唄にても源太は生田のもりのかつせんと云ふ
にあらざむば歌ふことを得ず最も合の字は音「がう」
かれは軸語のあとにあるときい矢張り談合調合杯の如
く持前の通りに響かすあれとも上にあるときは合躰合
掌杯と響かすは所謂イウフホニーの都合なり獨立共立
の立の字も句の上にあれば立憲立志あどとはいへ、り
けん、りしあどとは云はず彼は何故に斯く無理あこと

を望まるゝや

雑 録

○あて節さ語らむとして假名になき音をつけるときは
下作に聞へておかし普通の人には加賀見山亦助住家の段
に「主従が物をも云はず只うろく途方にくれて居た
りける」と云ふ所にて「トホナニ、クレエテ、キイタ
ンナ、ア、リケエル」と語るを聞く然れども此中の
ナの二字は不用の者からすやと思ひ居し故に此程社員
が團平丈の來京を幸ひに尋ねたれの丈は此の如き語り
様は知らず「矢張りあれはクレエテ。キタアア。ア、
リケエル」と語る方がすなほにてよろしかるへしと
云われたり

天狗狐につまゝる

翼々居士稿

人が下等の獸狐に迷さるゝとは日本の名物なれども

是は全く狐は化かすものなりとの想像の力より狼狽又
は半睡半覺の時に一時の發狂をひき起せるものなるへ
し、凡そ人の腦髓は思想を起すへき電池にして四十有
餘に局部を分ち感應欲愛敬信等を起し平等に之を働か
し得る者は普通の人なり然して其平均を失ふたるもの
は狂人なり夢は即ち睡中の思想にして腦中の血運平等
ならず故に尋常外の飛が如きことあとを見る、人もし
行くと思ふも躰の地の重力に支配され居ることを忘
るゝときは則ち(重量を記憶する感動部の腦の動かさる
あり)飛行するを夢む佛蘭斯語にてソムナムプリスム
と云は睡夢中の歩行する者を云ふ我國にも睡り居る者
が俄然起て戸外に出で一二の事をあして歸り伏すも覺
めて後に知らざる者屢々あり狐に迷はれたりと云ふ
も多くの此類にして喜怒哀驚等の甚しきを起し其平均
を失ふたるものなることは學理上の事實なり然るよ其
化されかたにも甚たおかしき者あり今を去ること四十

年程前に越中國高岡在の豪農の家に婚儀の盛宴ありて
素人義太夫の上手を招きけるが其語手三味ひき一人を
伴ひ行かけたるに途中の川原にかゝりたるとき俄に意
氣惚恍として既に彼宴會に列ありたる心もちになり種
々饗應馳走を受けて其後好により葛の葉の子別れを一
段語りしに満坐感涙を催ふさゞるはなく大喝采を得夫
より辭して歸らむとするに際し灯提を携へ迎ひに来る
者ありよく／＼看れば來ることの遅しとて彼の豪家の
迎の者なりければ初て其奇怪に驚くも解すること能は
す共にむれられてこの度は眞招れし家に到り再びやり
直しをせしに其時二人前の膳部が失われて不足してあ
りしは彼河原にて飲食せしときに此家より狐等が運び
去りしにはあらざるかとの考ありと是は學理上受取よ
くき話なれども今越中一般にかくれあき事にて誰あつ
て知らぬ者はあき位ありし彼宴席の膳二つが失せしこ
とと語り物の好が子別れなりしとは奇妙ある出來事に

あらずや人の天狗につまゝれしことは屢々聞くも天狗
が狐につまゝれたりととは之が聞き初あり
右の原稿を書き終りたるとき團平師の物語に之と同様
あこと大坂にありしと、天満の紳商魚又と云ふ人義太
夫天狗なり或日市のかたほとりを通行する時あき
家の内に慇懃に招かれたる心に成り入り込むて語りし
は矢はり子別れなりしと又阿波の御用芝居源之丞の一
坐はまんまと狐に欺かれて之も河原の廣芝の上にて葛
の葉を一段演じたりと然るに狐の狂言は千本櫻もある
にいつも子別のみなるは猶更訝し

女義太夫まさ鶴

も亦數年前野州宇都の宮にて他の一行と共に興行して
ありしが一宵安達の三段目を語り居り「氷を履むで」
と叫ぶやうのあとい音も呼吸もあくなりければ驚き樂
屋へかつぎこみ種々に手をつくせ共其しるしなく眠る

が如くにして眠るにあらず死せるが如くにして死せるにあらざれば合點行かず途方にくれて居たりしが一坐の一人がふと心づき「汝何故に斯く怪しき振舞をすや」

と大喝一聲して威しければ稍々蘇生したるが如くなりしも眼色頓に一變し(此時自ら狐といふことを感得せしもの、如し)「それでも政鶴さむがあまりに艶しくて上手に語るから一寸聞きに來たのぞよ」と我と我名をうわさして、すまして居るより己野干ごさんかれとよつてたかつて叱つたり打たりあすも平氣あればまた手をかへて南無妙法蓮華經々々々々々々々と異口同音に題目を唱へ居たりければエ、モいまゝしいから歸りますと云て走り出だせしが突然倒れて睡入りあとは難なくなりつると

茶碗屋巴太夫節付の事

茶碗屋巴太夫は三龍布袋井廣助を伴て演技するを常と

せりその比大坂三池橋にて大江山の狂言を書おろせしを始めて人形にて演ぜしとき近松半二の作ありしとかや

(是は徳川家儒官保積以貫氏の弟也)云ふ作物に筋附するるとき三段目保昌の館にて山姥がさわりに「産落せ


し男の子」といふ時に至りしときオノコノコは其母音悉くオの字なるに大に語り様に案じ居たりしが折しも

道路を呼謠ひ行く者あり太夫ふと心附き人を召び何者あるやを聞かしめしに其頃甘辛やとて七味唐辛を賣り

ある者なり太夫其音節に感じいやがる者を坐敷へ呼入是非と所望してあまひとらひが山椒の粉と謠を聞

俄に心附きこの文句あまひのヒの字からひのヒの字は中にト下にがの仄韻ある故に都合よけれとサンシヨ

オノコとオノコ共三ながら同じ音字が續けさまに來を謠あふせしは即ち我ヲノコノコと同じと案じつき七

味やが、と山椒のシヨとノとを一口

につめてシヨを捨字にしたるに習

中のコノを誥て捨字にして謠ひしより大に都合よくあり今奇らしきさわりの一例とする由古人の心を凝せしこと誠と思ふへし

義太夫を學ぶ者

は初によき師を撰むへし初の間は虚心なればよき風もあしきくせも染みやすし一度染み込みたるときは又抜けがたし素人考にて初にのちちらも下手なれば下手の師匠にても謝禮の平き者を頼みて足れり願くは今小し上達して後よき師に従はむとは大なる過なり古人云へるとあり初心の下手稽古は毒氣をふき込まるゝあり其毒は微毒の如く一度身に染み入るときは生涯の煩あり

○本月廿七日は如何なる不幸の日あるかや下谷和泉町より火を矢ち見るまに市村座の大迦藍にうつりて煉瓦の壁の外悉皆灰燼に委果てぬ衆人説をなして曰く此堅牢の建物の類焼せる理由なし恐は電燈より發したるからんとい最も無學の説なり電線もし他の火の爲に熱

するときの電氣力は衰へて發火の害は減するも増すことなし況や講事堂の遭難後は絶縁器の裝置稠密なるをや電燈社會こそ冤罪の難なり兎に角梨園社會の爲に吊すべきことなり



見よ二

すの字盡し

- 媚妓を公許せらるゝ中は廢妾論は出てず
- 博士學士號の金になる中は眞の哲學者は出てず
- 耶穌教の行はるゝ中亡者の行先は知れず
- 世界の人口の割以上水上の生活をなすに到らされは獸肉を食することは止まず
- 讀想學は俗人も解し得る様に至らざれば眞の道徳はあらわれず
- 世界に軍器の廢るる中は義太夫謠曲を廢へからず

英語の譯解

Excuse me to Proceed.

You are confirming yourself.

右二つの語を極めて平易の日本語に譯し得たる人へはその譯語を本誌第四號に掲げて二ヶ月分の雑誌を進呈す(宛名は本社内鈞深亭主人)

雜報

○本月四日より十日間の目的を以て木挽町厚生館に於て三府義太夫大集會を催ふされしが名程よりの人に行かざりしも其後に横濱にて催せしものは随分盛なりし
○故豊竹古朝太夫の門弟十二太夫は上京して本月一日より豊澤門遣の三絃にて牛込和良亭にかゝりしが下旬より吹抜にて大當なり

○播磨太夫は大坂文樂坐にあり語り物は三芳野勝二郎御所車にて三味線は鶴澤友二郎なるか開場前より景氣よく東京の最負連よりも贈り物等數くあるよし
○竹本美壽尾太夫は京都に滞在せし松方伯の招に應じ同地に赴きたるが去る八日伊勢に歸り伯の歸京を待て

上京するとのうわさ

○本月十日の夜より三日間信州松本に於て天狗連の大會あり語りては數十名もある中に藝妓などの飛入も多くあり中々の盛會ありといいと芽出たし

○大隅團平の一行は本月十六日より神田の立花亭にかゝりけるが頗る景氣よく夜中の席なれども午後五時頃より出かけすばよき場所は得られぬ程の大入なり

○歩行縦横自在なるが故に將軍の名を得たる動物學クラステーションヤ一門の蟹こそ僥者あり然して其蟹の名に因て常に續名されたる國會議員其君は何をすすにも抜

けめなき人なりとは人のよく知る所なるが此程大隅と伊達とがあべ町の鶴仙へ出でたるとき同町さらく亭の内儀と榊寺島屋の濱松葉屋小光の三愛に其送幕寄附の

事を命ぜられしものかしく出来す竟に土地の顔役川崎屋に更に依頼されて當地の藝者一人より三十七錢づゝを出金せしめて漸く注文の幕を調へ寄贈になりた

りど繪入自由に報じたるがまさか國會議員中にも鏘々の人が妓女の力をかりて人に物を寄送せられる様なことは万々あるまじとは思へども如何あるものにやもし嘘であつたら自由記者の痛く爪られはせぬか

○都新聞十三太夫を評して曰く

○豊竹十三太夫は古靉の門弟たる價値は確にあり艶語りなれども東京仕立のケレンと違へは例の厭味なく詞を節にて行く所など眞打の太夫なれば何れの太夫も其場所又は人物の腹を多少飲込んで居るは勿論の事なれども十三太夫は此が古靉より傳へたる語口なるにや充分に心得て一句く油断なき語り調子大いに好し聲は相生の聲の好所を持ち前としたれば艶語りとして上々且つ東京の人氣に合ふは受合あり唯暫く中絶なし居りしものかと思ふ所あり野崎久作の調子など充分シダケ且つ角の取れぬ所あれど此は語り込べ聞直さるべし其後紙治を聞しが書置の所な

ど遺過る所もあれど先づ上乘なり酒屋さども妙なるべしと思ふの如何にや

とは至極妥當の批評なりと思はる

○竹本土佐榮の別品で美音で評判の高い女淨瑠璃竹本土佐榮は一昨年當地に來て非帶の大人氣を取りしが今度又々當地に乗込み今夕より博多土居町安樂舎に於て興行することとなり昨日は市中の各最負先へ挨拶に廻りたり人々の待ち設けたる折りといひ且つあの喉で例の多情多恨のうまい所を演られてはコイツ聞かずんばあるべからずと夕飯の時刻を切上げて出掛ける人必らず多からん (福岡日日新聞)

○片居越路太夫片屋浪太夫と最負連が相撲に見立た阿波淨瑠璃の竹本浪太夫は本月四日より京都の南芝居にて興行し北の芝居に興行の越路太夫と競争去ぬる廿一日迄打續け大人氣を占めたるより抜目のない當市の千歳座にては早速使ひを京都へ飛ばせて右の

一座を呼迎へる事になり其相談も整ひたるに依り全
 一座は明後日あたり當地に乘込み廿七日頃より南桑
 名町の千歳座よて與行する由にて其連中は左の如し
 (新 愛 知)

竹本浪左太夫

鶴澤清一

竹本小楳太夫

鶴澤小友

竹本大木太夫

野澤喜風

竹本浪太夫

野澤町助



餘興 曲子
 粹多樂詠

題 義太夫文句讀込み

番外五客

浅草 夏の家若葉

急て書く文邪魔する動氣あどや先なるうらみごと。

高崎 春川居魚友

瓶持言葉に二足ふめどひくきしきあもこへかねる。

古河 小倉軒小幾
 一人更して居るうきねもひ主は待てどもこな煙草。

松本 四海艶史

氣障なれ客が無休のれんぼごまして打どは知ぬ背。

崎玉 笹の家醉娥

こゝろをたりどつきこひ言葉挫りあてたる主の穴。

卷中感吟 京都 杉の門樽人

どめた昔を思へばいとふるすはなをさら物あんじ。

高崎 春川居魚友

互にひころのねがひが届き思ひをほねの友しらが。

京都 杉の門樽人

ころしたなげきも末にの陀度寐物語にするつもり。

軸 評者 三姆家園子

髪飾もいくちよいはふ添たい思ひのたけながに。

卷中秀逸 埼玉 笹の家醉娥

及ぬ事だと斷念乍らみれんなたしがりいふへ。

牛込 松葉屋金次

怖さ嬉さよふくとして可愛がつて手をつかへ。

松本 四海艶史

れもひそめたがこひぢのもとで今は枕も重ひ臥床。

竹巴連 鬼の屋牙人

こちでもれもへは遂其人もすれつもつれつ成た中。

松本 四海艶史

あかぬ別に又ふり返りみやるめもとにひとしくれ。

古河 喜樂道人

あいたいみたいか日増に募り今ぢや毎夜の夢に迄。

牛込 榮樂家仲助

別際ほごかなしさかくし末練を含んぶわらひがほ。

竹巴連 慶算子

ばんにくと一寸のがれ又もごまして來ぬにくさ。

横濱 松蘿園合中

さし足ぬき足うかひよるも善惡ない口の端忍戀。

浅草 夏の家若葉

今さらかへらぬこといは知と云はぬは矢張澄ぬ胸。

番外五客 古河 小倉軒小幾

恨の數をは折る指先を忘れてこゝろをつくしごと。

埼玉 金の家福娥

何をいふにもしらぬがまこと疑はれるのか勤の身。

牛込 榮樂家龜子

住も浮世にみのねはりさへさめ湛につなぐふね。

在京 竹木小土佐

ね顔見たさに途うかくとあひよきたやら南やら。

神田 樂壽亭壽樂

寐もせず焦れて君まつ虫のあくねも怨を添る愚痴。

感吟三光 高崎 春川居魚友

嫌な琴責引にもひげずむねもくぶくるぎりずくめ。

人

地

日本橋 三河屋小秀

みじかいちぎにり話も半はいわかれに滯す袖。

天

柿巴連 柿の家子猿

あいたいみたひと身は夫戀の今宵も狐火こがす胸。

同ト心を

撰者 檀の家色人

思ひ返して氣も深草にまよひはぐれしかたうづら。

○

われもまねて

社 末 粹多樂史

尾首も曾から察して空にかけをかくすや月のいり。

〔わびごと〕 本誌に縁あれはとてわざくの寄書ゆへ

右の如く掲げ一回ぞけ課題を抜にし第四號には三四回

分共掲載いたし舛れは左様思召の上澤山御出詠被下度

候と一寸おわびを書くのごとし

第四回餘興課題「物はづくし」

題 義太夫社會の事一切 四月十五日ノ切一名十吐限り
高點の人へ本誌一部宛呈上す

作例左の如し

○すこいものは女郎の手管と清玉のにらみ

女義太夫五名家の投票に就て

凡ての投票百數十に及び遂に名望家にては東玉。綾之助。愛嬌家にては熊梅。小土佐同票ありし然れども二回の投票にて終に別項の如き結果を呈するに至る投票の内文字不明のものハ之を除き二名連記せしものは乙を除きし尙ほ右の外にも投票を得し人は左の如くなれば記して投票家に告ぐ

〔名望家〕 小政。小清。小住。團玉。花支。綾之助。

〔愛嬌家〕 住之助。東代玉。小虎。小染。綾之助。愛之助。

〔美音家〕 駒之助。小清。清玉。錦。香朝。八重子。

廣竹。

〔巧藝家〕 越子。熊梅。小住。花友。香朝。錦。團玉。

清玉。小虎。

〔美貌家〕 越子。小染。鐘升。呂幸。榮久。愛之助。

熊梅。小米。呂糸。

女義太夫五名家投票結果報告

名望家

竹本東玉

百三十六票

次點者

竹本綾之助
竹本越子
竹本小土佐

愛嬌家

竹本小土佐

百十七票

次點者

竹本熊梅
竹本越子
竹本一二三

美音家

竹本綾之助

百三十九票

次點者

竹本小住
竹本小政
竹本住之助

巧藝家

竹本小清

百十二票

次點者

竹本東玉
竹本小政
竹本素行

美貌家

竹本清玉

百〇九票

次點者

竹本綾之助
竹本小土佐
竹本駒之助

魚槍。小米。呂糸。

社 告
逸 事 小 傳 集 募

在京義夫太五名家の小傳並に逸事を募集す其
文約にして實を穿つ者は之を掲載し尙し掲載
相成りたる上は其寄稿者へ一部進呈仕候○癖
なくて七癖とやら善惡共に癖のなき者はあし
之を記して本人に示す又矯正の一なり但し男
女に限らず乞ふ共に四月三十日限り御遞送
義太夫雜誌編輯局 七文字屋微笑宛

廣 告

京橋區南紺屋町十九番地

● 技術の巧なると値の
● 廉なる他に比類なし

得 兩 館 活 版 印 刷 所

神田地方は義太夫雜誌社へ御注文あるも差支あし

○ 貸本の廣告

政治小説歴史法律醫書隨筆傳記等可成安く貴需に應ず
駿河臺西紅梅町六番地諸新聞取次所 衷 和 堂

大 附 録 の 豫 告

三號を以て雜誌の厄とせし此號を超越せし四號と云ふ
聲は最も喜ぶべく最も祝すべき文字なり本誌發行以來
幸に讀者の愛を得印刷部數既に五千部以上に達す於此
本社に此厚意を報せん爲本誌第四號に於て近松翁肖像
外尙一大附録を添へんと欲す

附録は専ら諸大家の文什を記載するものあるも本誌直
接愛讀者にして寄稿せられんと欲する諸君は左の種目
中得意のものに任せ來る四月十七日までに本社編輯局
へ宛寄稿あらん事を請ふ

掲 載 種 目

義太夫に關する記事。論文。逸事。小話。詩。和歌。
俳句。狂詩。狂歌。戯文。贊。頌。曲子。

紙上の記載は到着順にし延着の分は次號へ譲れ
は可成速に寄送を請ふ

今般左の處へ轉居從前の通開業仕候此段諸君に告ぐ

齒科治術時間

午前九時より
午後二時まで

麴町三丁目十八番地(大横町) 若井金作

弊舖の寫眞は可成鮮明を主とし年を経るも變色なく且可成廉價を主とし貴需に應し約束の期限は履行可仕候間何卒御來車被下度願上候

尙急速を要せらるゝ向への特約の上速に調進仕候

上野廣小路鳥八十の隣

吉川寫眞師

義太夫雜誌の投書にして間々拙宅へ御郵送有之候人御座候もかくては遺漏の恐有之候得へ必ず本社編輯局宛御發送の様願上候也

服部霞峰

三絃並見臺の金物師 井原國太郎

下谷西町三番地に住居右營業仕候間
御往文被成下度候也

社 告

○本誌投書家駒場山崎君に差出たる書届先不分明にて戻り來りしかば再び御通信の節は精く願上候
本郷臺町川口君より結構の祝文を賜りたれども記事多端次號へ譲り君の厚意を謝す

上野停車場旅舎山城屋

家屋潤大各室呼鈴（上がサ）の備あり食物の營生を主とし夜具は清潔にして几て旅客の用を達するは迅速（はなやか）を尊ひ萬事無油斷勉強仕候間必御一泊の上御試を願ひ上併て斯に從來の御客様にも猶御愛顧の程を奉祈候也

僊華琴

上製壹面撥附金三圓五拾錢より
並製壹面撥附金二圓も二圓八拾
錢荷造費金三拾錢

僊華琴は形體麗雅、音質優美、音量擴大、彈法容易、
攜帶便利、且一器にて和漢洋の諸曲を彈するに適切か
るは大に世の賞讃を得たるを以て証すべし請ふ音樂の
志士試に彈味あらん事を

取次所

音樂雜誌社

音樂雜誌

一冊金六錢半年分郵稅共にて
金三拾五錢郵券代用一割増

本誌ハ歐州樂、雅樂、能樂、明清樂、俗樂舞踊、童謡、
等新古を問はず樂譜を添へ解釋を附したる者なれば初
學者にも能く獨習し得るの便ある音樂の好侶たり

發行所

東京市麴町區有樂町三丁目一番地

音樂雜誌社

橫濱誌本賣捌

橫濱市吉田町	鶴聲堂
全伊勢佐木町壹丁目七番地	倉田書店
全太田町	倉田書店
全伊勢佐木町二丁目拾六番	松泉堂
全松ヶ枝町	弘泉堂

豐竹律太夫

下谷區仲徒土町三丁目
三十九番地へ轉居仕候
從前の通義太夫の稽古仕候間賑しく御來訪被成下度候
且又稽古本の義も私方にて引受書料朱點入一葉二錢ッ
ッにて御引受申上候也

湯島天神町三丁三番地え
三絃師

轉居仕義太夫三絃の義は
桐屋福太郎

格別丁寧廉價に調進仕候

府下本誌賣捌所

全松住町三番地
 全平川町四番地
 全松富町四番地
 全旅籠町壹丁目
 全今川小路壹丁目
 全一ツ橋通り町
 全南神保町
 全尾張町二丁目
 全銀座二丁目
 全三丁目
 全橋南傳馬町二丁目
 全新葭町三丁目
 全米澤町三丁目
 全北島町二丁目
 全茅場町一丁目
 全蠣殻町一丁目
 全人形町通り
 全長谷川町
 全裏神保町
 全小川町
 全二丁目三番地
 全錦町壹丁目
 全美土代町四丁目
 全鍋町廿一番地
 全田區鍛冶町五番地

清水 常次郎
 清水 嘉兵衛
 武藏屋 支店
 武藏屋 本店
 良藏 故
 大塚 塚
 上田屋 書店
 青柳 堂
 室山 堂
 具足 屋
 越後屋 米治郎
 清水 伊兵衛
 伊勢屋 伊兵衛
 三舍 堂
 旭屋 藤兵衛
 武藏屋 支店
 三宅 支店
 柏木 延三郎
 河内 屋
 若狹 屋
 若狹 屋
 佐江 木
 松江 堂
 春雲 堂
 春雲 堂
 岩手 屋
 覆本 衛
 芳壽 堂
 中井 德治郎
 坪井 安太郎

全日本橋區本町二丁目
 全通り三丁目
 全長谷川町
 全出雲町五番地
 全二番地
 全下谷區東黒門町
 全仲町入口
 全御徒土町壹丁目
 全仲徒町壹丁目
 全車坂町六番地
 全上車坂町廿五番地
 全二番地
 全坂本二丁目八番地
 全竹町十二番地
 全竹町十二番地
 全草區瓦町十番地
 全須賀町十六番地
 全諏訪町十九番地
 全並木町七番地
 全壹番地
 全仲見世
 全馬道五丁目二番地
 全花川戸町三番地
 全所區相生町二番地
 全川區東森下町九番地
 全常磐町壹丁目
 全芝區巴町四十六番地
 全飯倉三丁目
 全三田壹丁目

庭花堂
 丸屋龜治郎
 石島八重
 金山泉
 金山盛
 山田屋
 三田屋
 伏見屋
 勝岡新助
 永岡新助
 仁井田忠八
 金子忠八
 寶永堂
 野田堂
 岡村源七
 岡村源七
 柏原伊之郎
 文花堂
 文花堂
 上村宏
 三村宏
 三村宏
 大松宏
 野松宏
 小野宏
 小林野
 見珍堂
 加藤萬之助
 安野常
 吉野常
 念三野
 東河屋傳右衛門堂
 駿野

岸田書店
 鈴木嘉吉
 北原雜誌店
 倉田書店
 赤川書店
 井原書店
 忠愛支店
 加藤清三郎
 石井六之助
 弘春堂
 盛春堂
 田中書堂
 解成堂
 龍壽堂
 文壽堂
 遠州屋
 伊勢屋
 鈴木新兵衛
 鈴原雜誌店
 栗原清吉
 篠原甚吉
 篠原甚吉
 三河屋
 日成堂
 東山堂
 開進堂
 昌盛堂
 洗心堂
 文善堂
 正善堂
 深野舍

◎義太夫練磨會廣告

本會ハ明治廿五年の九月創立せしものにして會員既に三百有餘名の多きよ至れり本會の要旨ハ探長補短を本とし切瑳琢磨の效により義太夫謠曲の進歩を計り俚俗の快樂をして優逸ならしむるにあり左れば入會を望まると諸君は藝人と否を論ぜず黨派を問はず老幼男女に關せず廣く之に應ずるものなり規則書を要せば郵券二錢封入申込次第進呈すべし

神田紺屋町四十四番地

幹 樂 壽 亭 壽 樂

申込所

本郷區三組町九十二番地

服 部 霞 峰

告

ちらし。口上がき。引札。廣告

の案文。意匠あとの。もどめに

條

應ずるものは。義太夫雜誌社の

紹介。峰の家霞と申ひとなり

以

上

◎投書規則

投書は凡て到着の順序を以て掲載するも未完稿は之を採らず○批評等にして類似の者ある時其優れたる者を掲載す○次號に譲し投書にして其事柄の既に陳腐と認むる時之を省く○誌上の匿名あるも投書に住所姓名あき者は掲載せず○投書は眞書にて廿四字詰と玄判明に認め義太夫雜誌社編輯局宛にて送るべし○投書の返却せず○問合せは往復はがきか又ハ郵券封入の事

本誌定價 一部三錢五厘 前金の分は本社へ

地方は一部に付郵送費五厘申受く

廣告料 一行二十四字詰四錢十行以上一割引

但し義太夫謠曲に關する者に限り二割引とす

代金を替半圓以下の郵便切手にて宜敷以上は

神田郵便電信支局振込受取人岡田廉二宛の事

社 告

發行所

義太夫雜誌社

東京市神田紺屋町四十四番地

明治二十六年三月三十日印刷同三十一日出版

東京市神田區紺屋町四十四番地

發行兼編輯人

岡田廉二

全市下谷區御徒町三丁目百一番地

印刷者

奥山東太郎